

C 主要史料 (福島県)

同名主 文右衛門[㊦]

同検断 六郎左衛門[㊧]

同名主 八郎兵衛[㊨]

御代官様

●史料1 元禄一三年(一七〇〇)二月二十六日 乍恐以書付奉願上候(□
□共当宿へ下り旅籠狼藉)『本宮町史 第五卷』
乍恐以口上書申上候事

一去ル廿三日二本松□□ニ罷有候□□□□本宮江罷越町役人共江申断
候者今度 御法事ニ付穢多勤方之儀被仰付候、依之当町郡山より女持旅
館屋亭□□□□葬礼之節召仕可申之由ニ御座候、役人共あいさつ仕
候者右之子細御役人衆中様江奉窺候而右之分ケ申断候哉と相尋候得者
□□□□二者無之候、自分共了簡ニ市召仕可申と存罷越申候事

一本宮両町人共驚入申候、旅籠屋仕候者共先年より食売女召仕来候若^け
□□分ケニ而江戸大坂京都杯之町外之者共並ニも存候哉其分ケニ而者
無御座候、私共往還ニ罷有御 公儀様御自用共ニ夫伝馬諸事□□用相勤
其々ニ御田地を所持仕御百姓之義ニ御座候、右之仕合ニ御座候へ者穢多
共方より何ニ而茂支配請可申儀無御座候事

一先年 賀藤民部少様御逝去被為遊節本宮町より六七人手当申付候由穢
多共申候、其段承伝不申候、一切虚言申懸候、食売女召仕申儀往還ニ市
御当領計ニ者無御座候、道中筋所々之並ニ召置旅籠屋仕候、何れ之御領
旅籠屋を承申候得而茂穢多之支配請申所無御座候、此度穢多之支配を請
町外之類ニ罷成候得而者当所郡山共ニ御 大名様御宿等可仕様茂無御
座候、御下宿旅籠屋之者共給仕人々ため下女召仕来申候事

右者御中院之節恐多奉存候得共穢多共度々参候而申聞候、此節諸事可奉
延慮仕儀ニ乍恐奉存候、当町畢竟相勤ニ茂御座候間奥野与市左衛門様江
被仰進穢多共静り申様に下成田村名主江被仰付被下候様ニ奉願候、以上

元禄十三辰ノ年十二月廿六日

本宮村 旅籠屋之者共
同検断 与五右衛門[㊩]

●史料2 安永四年六月 馬市并食売女之事(「諸家秘聞集」『問答集3
諸例撰要・諸家秘聞集』創文社、一九九九年)

御用番田沼主殿頭様へ差出候処、八月廿四日、御留守居被召呼、御
附札ニ而御差凶相濟

私在所奥州福島城下町、近年度々焼失ニ而衰微仕候ニ付、為助成馬市迫駒
致再興并旅籠や食売女差置申度旨ニ付相糺候処、迫駒之本領分受取候節之
引渡帳面ニ有之、打続市相立候旨相聞、享保之初馬代金貸附之儀も書面ニ
相見、其後いつとなく中絶仕候段相違無御座候、食売女之儀者、旧記致焼
失候も有之不慥候得共、奥州休泊之往還ニ而旅籠屋も従前々有之候間、壹
軒ニ壹人ツ、差免申度候、迫駒之儀者致中絶候事故、最寄馬市場布施弥市
郎御代官所奥州信夫宮代村へ、福島城下町役人より右役人江懸合候処、差
障無之趣申越候、右之外最寄ニ馬市場無御座候間、右村方市差合不申候様
ニ日限定、一ヶ月六度之馬市迫駒差免候様仕度候、依之奉伺候、以上、

六月九日

板倉河内守

御附札

馬市之儀へ、宮代村其外同国瀬山村ニ而も馬内有之候間、右宮代村、
瀬山村市日相除、福島町ニ而馬市相立候儀者勝手次第候、且旅籠や
一軒ニ食売女一人ツ、差置度旨、是又可為勝手次第候、

●史料3 寛政九年六月 郡山・本宮両駅飯売女奢侈禁止令（『本宮町史 第六卷』）

覚

郡山・本宮両駅飯売女共之儀ニ付、此度桑折御陣屋ニ而岸本弥三郎殿両代官中へ被申達候次第言語同断之事ニ候間、右女共之義奢ケ間敷義無之様可致段者先年も時々申付置候事ニ候処、密々ニ者大造之衣類・首飾等相用ひ候事ニ相見、

公儀御役人中より御沙汰も有之仕合、此已後右躰不相止候而者対公辺等も不相濟事ニ候間、此方よりも糺方之候処相廻し不用者も候ハ、急度咎筋夫々可申付候事

一衣類并夜具等まで絹布用候義一切停止之事

一櫛・かふかい・かんさし等飾、金銀者勿論、銀流し之類までも用候義停止之事

附、首飾之義櫛ハ老杖、かふかい・簪一本つゝニかきり数多相用候義停止之事

一旅籠屋ニ不限惣而表廓ニ而三味線ひき候義停止之事

一食売女共人数之義者先年も申付置通、成丈滅相抱候様可致候事右之趣尚

又申達候間、被得其意名幡仙十郎・馬場衛守へ可被申達候、此外ニも岸

本弥三郎殿口達之次第右両人心得居候事ニ候間、諸事心付取締方無油断可被取斗旨是文可被申達候、以上

寛政九巳年六月

郡代中 郡奉行中

●史料4 天保二年五月 飯盛女御免願（『二本松市史 第六卷』）
乍恐以書附奉願上候

本町之儀者兼而困窮之町ニ御座候所、先年打続火災後者以前ニ茂復シ兼ニ弥増難渋仕候処、追而以厚キ思召御救ヒ御手当被成下難有仕合ト奉存別而面々之渡世相励候得共、近年世間一体不景氣ニ而人出茂少ク諸商売而薄ク今日迄ニ経営而口過罷在候付、何卒町内引立一同利潤ニも相成手段可有御座候哉ト是迄も度々打寄相談候得共、前文申上候通当町之儀者人出少ク商売向不勝手之場処ニ而商見込も無御座旅籠渡世を重ニ仕泊人数多ニ相成候ハ、自然と人も相増シ外ノ商之利潤ニ可罷成奉存候、然処外ヲ省ミ見察仕候得共、飯盛女御座候場所旅人泊も多ク宿内賑候様奉存候得共、当所之義者女無之不自由ニも存候哉至而泊少々而當時渡世仕候間、何卒当旅籠屋共食売女相抱渡世仕度兼々一同念願ニ御座候得共、右躰奉願上候儀者容易之儀共不奉、存乍然外ニ手段茂無御座面々心痛仕罷在、勿論在来分旅籠屋共極々難渋仕家作手人も出来兼候仕合、近々可及□ニも躰之者も相見、此上旅籠屋数相減候而者御用宿者不申及、当宿泊ニ相越候旅人迄甚指支ニ相成可申と奉恐入、且町内之者共外ニ渡世之見詰茂無之人気茂此上、猶又寝入候様罷成可申と一同歎ハ敷奉存候、右ニ付何卒食盛女町相抱渡世為仕候ハ、自然と当所江之泊茂多ク罷成、町内格別之潤□ニ茂相成可申之奉存、是迄旅籠渡世心掛居候者共追々家作相直シ渡世仕度旨奉存候得共、旅籠屋計茂不潤商向者勿論、小前之者迄一統潤ニ相成行々町内一同引立ニ茂可罷成と奉存候、然上者御当所之指障り等無御座候様何分ニ茂可仕候間、何卒別段当町御救之以思召飯盛女指置候義御免被成下度町内一同奉願上候、右願之通被仰付被下置候ハ、町内一同難有仕合ニ奉候、以上

天保二卯年五月

本町總代長町人 文右衛門

茂兵衛

差出し申一札之事

一当御支配所村々一統、桑折・藤田両駅旅籠屋共新法二機織女名付、売女体之もの召抱渡世仕候二付、近年若背之小前・作奉公人・無商売・無宿同様之もの数多入込、郡中之難渋二相成、御百姓一同自然相哀、御上納御日限通差支二相成、諸役人一同迷惑至極之旨被申立、御支配所村々一統、連印を以可奉出訴之趣二付、桑折宿良兵衛・善兵衛兩人相頼、相詫候得者、両駅旅籠屋共我儘勝手之渡世仕、郡中之不益茂不弁、甚々御申訳も難相立候処、早速御宥免被成下千万忝仕合奉存候、依之両駅旅籠屋共、以来郡中二而損失物等有之節者留宿隠置候もの共の仕業有之候時者何方留物、何方迄も尋出し、急度御仕末仕可申候、尤末々迄心得違無之、急度相慎可申候、依而此度旅籠屋共一同勝手我儘成渡世仕候を御勘弁之上、御見免し被下候上者、大切二相心掛、無作法無之様可仕候、尚又近在村々若背之小前之衆、老夜たり共宿申間鋪候、猶亦無商売・無宿同様之もの留置、後日二相露頭候へ者何時何成共右之女共如何様二被仰付共、老言御恨申間敷候、為後証之一札差出候所、依而如件

藤田村旅籠屋

桑折宿旅籠屋

源次郎

新右衛門

石蔵

長八

栄蔵

彦吉

忠右衛門

小左衛門

惣助

惣七

惣吉

治兵衛

文化十三年八月

前書之通我々共立合承知申候、以来不埒之儀無之様為相慎可申候、依之奥書差出し申候、以上

桑折宿名主兼帯

久保理右衛門

検断 良兵衛

同断 弥平治

同断 武左衛門

組頭 善左衛門

藤田村名主 伝之助

検断 太左衛門

組頭 久八

(梁川町 宍戸幸司文書)

忠八

善五郎

丈右衛門

三郎治

源七

新八

善吉

一三郎

藤三郎

庄八

幸右衛門

庄三郎

一右衛門

理右衛門

●史料6 嘉永五年八月 藤田村旅籠屋の差し出し証文 (『桑折町史 第六卷 資料編』「近世史料」)

差出し申一札之事

一藤田村旅籠屋之儀者飯売女老軒二付三人限、其余多人数不召抱、追々渡世替可仕見計を以聞濟二相成候事

一郷中村々老若不限、一寸たり共酒盛相手為致間敷候事

一作稼奉公人老夜たり共留置間鋪、若見間違二而留候節者御勘弁可被下候筈

一無商売ひ、無宿同様之もの留置間鋪候、若心得違を以留置郷中二損失物有之、当宿江隠置、又ハ手引仕候もの有之候ハ者、何方迄茂罷出候得共、

急度御始末可仕候事

一日々七つ時より見せ為張、往来之旅人留候儀者格別見せ等為張申間鋪候事

右者我共新法ニ飯売女与唱、売女体之もの召抱渡世仕候二付、諸国之悪党もの共入込、郡中村々自然押蟠り、一統及難渋、御上納御日限通御割合差支候様罷成、難渋至極之旨、近在村々老統連印を以被致出訴、尚又文化・文政之頃も被申達、旅籠屋共之勝手之渡世ニ御座候得者、重々御申訳無御座候、既ニ替払ニ可相成之処、高子村熊坂宇右衛門殿・四ヶ村名主吉平殿右三人を相頼、御詫候得者、格別之御勘弁を以御宥免被成候、千万忝仕合ニ奉存候、依之右ヶ条之通急度相慎、少茂違背仕間鋪候、若老人たり共心得違之この有之候ハ、仲間老統右付如何様被仰聞候共、一言之御恨申間鋪候、為証旅籠屋一統連印を以差出申所、依而如件

嘉永五年子八月

藤田村旅籠屋	新吉
同断	長右衛門
同断	徳三郎
同断	永藏

右村々
御役人中様

前書之通我共立会承届ケ、以来不埒無之様為相慎可申候、依之奥書・印形差出シ申候、以上

中野村名主	取扱人	吉平
四ヶ村名主	同断	宇三郎
高子村	同断	熊坂宇右衛門

右之通藤田村旅籠屋老統より詫書一札式通取置候処、本紙之儀泉田村・東大窪村古料役元右両所江詭置申候、以上

(梁川町 宍戸幸司家文書)

同断	今之助
同断	彦兵衛
同断	松吉
同断	辰藏
同断	専治郎
同断	仙藏
同断	市右衛門
同断	宇藏
同断	専吉
同断	富吉
百姓代	八右衛門
組頭	祐吉
名主代	藤七
検断	太左衛門

●史料7 明治四年(一八七二)白河県の病院建設につき飯盛女人数調査
(庄司吉之助「飯盛女の労働とその解放条件」『福島史学研究』一三号、
一九七一年)

旅籠屋家数並売女員数冥加納積書
家数百四十四軒 白河駅、白坂駅、矢吹駅、須賀川駅、郡山駅

内十九軒 売女無之

此売女人数四百二十五人

内四十人 当未十三歳以下除之

残三百七十八人 当未十四歳以上

●史料8 明治五年正月一〇日 病院取建のため旅籠屋へ課金割当通達
〔『今泉家文書』近代租税24〕

今般人民保護之為メ病院御取建相成、右入費助成として其駅之旅籠屋共江
出銀申付候条、当月より向々村役人取纏上納可致事

但助成金之義ニ付商売之盛衰ニより出銀之多少も可有之筈之所、一時
適宜ニ至り兼候条、当分之中飯売女之多少ニより軽減申付候事

定則

老ヶ付銀五匁宛

旅籠屋老軒

飯売女老人抱置候者

同 銀拾匁ツ、 右同式人抱置之者

右之通抱女老人ニ付銀五匁ツ、増加申付候条、五人抱之者ハ銀貳拾五匁、
拾人抱之者ハ銀五拾匁ニ可相心得事

右之通相違候条無遺漏順達至急可相届もの也、尤此廻章留り駅より返却可
致候事

壬申 正月十日

元白河県

庶務局印

矢吹駅[㊤]

白坂駅[㊤]

白河駅[㊤]

須賀川駅[㊤]

郡山駅[㊤]

右駅之

役人共

●史料9 明治五年九月 湯本村湯女始末書 〔史料 常磐湯本温泉史〕
(表紙)

湯女始末書

磐前郡湯本村

乍恐書付を以奉申上候

磐前郡湯本村湯女、飯盛差置候儀、何等の廉を以、願濟相成候哉、始末書
可差出旨仰蒙り承知奉畏候得共、何年已前より御見済に相成候哉、古帳等
は無御座□□ふ相訳只々二百年已前より湯坪一ツに付、飯盛二人宛御見
済に相成候様申伝候、尤文化年中田畑共多分の手余りに相成、既に荒地に
可相成処湯女持人面の者共へ増石被仰付候古帳一冊御座候て、其分右書等
は無御座、往古の儀は細詳相知不申、乍恐此段以書面奉申上候

上

明治四未年七月

磐前郡湯本村

百姓代 比佐恒三郎

組頭 新田采助

庄屋 比佐儀左衛門

白河県四倉御役所

(後略)

〔寺亀文書〕木村重英氏蔵

●史料10 明治五年十月 磐前県へ湯本村旅籠屋渡世願〔史料 常磐湯本温泉史〕

旅籠展渡世向御願

第一大区小十一区

磐前郡湯本村

右は当村旅籠屋一同奉願上候、一躰村方の義は温泉場にて湯女、飯盛奉公人相抱渡世仕候義御見済に相成、永続罷在候処、今般、御趣意被仰出、年季奉公人証書解放可致旨被仰出承知奉畏候、別冊の通り速に解放仕候処相違無御座候、乍恐前書奉申上候通り、当村の義は温泉場にて二百余年、右渡世向仕温泉御役永御上納罷在候間、何卒今般御規則の通を以、相對飯盛置、芸妓渡世住度望の者有之候はば、同居稼為致度奉願上候、尤復籍為致婦女共においては御趣意の段、難有奉存候得共、中には遠国の処、幼年の罷出は父母の存亡も不定か、且は親族の内在の候ても病身、又は災極にて親子扶助のため不取敢致馴候飯盛、芸妓渡世仕度もの多分有之候に付、誠実相糾し候処、相違無御座候間、右等の者へ何卒以御仁沢御聞濟被下置候様、偏に奉願上候

右願の通り、御採用被下置候はば面々余業の見込を付け渡世に基き候はば

御規則の廉々急度相守正路に渡世仕候間、伏て奉歎願候

明治五年十月

磐前県参事 村上光雄殿

磐前県権参事 児玉代精殿

〔寺亀文書〕木村重英氏蔵

●史料11 明治六年十二月 大蔵卿へ遊女芸妓貸座敷等渡世に付伺書〔史料 常磐湯本温泉史〕

遊女芸妓貸座敷等渡世の儀に付伺

当管内宿駅及海岸船付場、旅人宿にて、従前飯盛女等の称を以て、其実売女なるもの有之候処、昨壬申年第二百九十五号娼妓年季等解放御布告に因り、当時悉皆御慶申候、然るに右体の者は他に産業無之、忽活路を失、遂日困乏に迫候より、再三再四歎願申出候に付、前途正業就産の年限相立鑑札相渡、遊女芸妓及貸座敷渡世口許、別紙の通当県限税金取立、右金を以管下道路橋梁修繕費用の一端に充申度、出入金額の儀は年々二月中取調御届可仕候間、御許可有之度、此段相伺申候、以上

明治六年十二月十四日

磐前県権令 村上光雄

大蔵卿 大隈重信殿

税則

売女 一人一カ月

一、芸妓 但 金一円

一、貸座敷 一戸一カ月

但 金三円

右の通候也

〔福島県庁文書〕